

実践報告

グローバル化に対応するカリキュラム・マネジメント

——神戸山手グローバル中高の英語教育について

平井 正朗*

*神戸山手女子中学校高等学校

Curriculum Management for Globalization: English Education at Kobe Yamate Girls' Junior & Senior High School

Masaaki Hirai *

* Kobe Yamate Girls' Junior & Senior High School

The author has been involved in the management of three private schools and in public educational administration as a member of the Osaka City Board of Education, and has since developed curriculum management and has achieved some success. At the same time, the author has continued the research (Hirai, 2015, 2017, 2020, 2022, 2023a) at the International Society for Education, focusing on the construction of a theory of curriculum management.

In this paper, we use a case study of Kobe Yamate Girls' Junior & Senior High School, which has been working on school improvement, and discusses English education through curriculum management in the school's educational reform.

Global citizenship is required to be aware of global issues that exist beyond national borders, to proactively perceive them, and to take action to solve them, in order to create a society that respects peace, society, and diversity. The discussion on global citizenship will become interdisciplinary and cross-disciplinary, not only in humanities fields such as international relations, sociology, education, political science, and economics, but also in science fields. In this context, the handling of global issues such as generic skills for living independently in a knowledge-based society and for sustainable development will be linked to global citizenship education. The full-scale reform of school education is just beginning.

Keywords : curriculum management, English education

キーワード : カリキュラム・マネジメント, 英語教育

* 〒650-0006 神戸市中央区諏訪山町6番1号 神戸山手女子中学校高等学校

Correspondence concerning this article should be sent to: Masaaki Hirai, Kobe Yamate Girls' Junior & Senior High School, Suwayama-cho 6-1, Chuoh-ku, Kobe, 650-0006, JAPAN

Email: masaaki_hirai@kobeyamate.ed.jp

1. はじめに

勤務校である神戸山手女子中学校高等学校は創立 100 周年を契機に、歴史と伝統を継承しつつ、学院の方針であるグローバル教育の推進するため、2025 年度より一部共学化を図り、校名も神戸山手グローバル中学校高等学校と変更し、さらなる発展に向けた教育実践を展開する。筆者は、これまで私学 3 校の学校経営及び大阪市の教育委員として教育行政に関わる機会を得て以来、独自のカリキュラム・マネジメントを展開し、一定の成果を収めてきた。同時に、国際教育学会において、その理論構築をテーマとした研究（平井 2015, 2017, 2020, 2022, 2023a）を継続している。本稿では、同校の教育改革におけるカリキュラム・マネジメントを通じた英語教育について考察する。

2. カリキュラム・マネジメントの事例研究

2.1. 2023 年度の教育実践

学院の教育ミッション及び新学習指導要領に対応する学力保障に向けて、タイムマネジメントシートを全学年で作成、担任のコーチングを全学年で実施している。また、生徒個々の振り返りの時間であるリフレクションアワー、シラバス公開、定期考査分析会、模試分析会、小テスト分析会、大学入学共通テスト勉強会、教員研修会、学校評価、授業満足度調査も実施している。教員の資質向上に向けては委託研究（日本私学教育研究所）を 2 年連続で獲得した。『先端的教育ソフトウェア導入実証事業補助金』（経済産業省）を獲得し、インドネシア、トルコの中高生と英語によるオンライン探究交流を行った。「2023 年度学校評価」における教員の資質向上についての教職員の充実度実感が 100%となり、教員の研究意欲が向上し、授業の活性化につながっている¹⁾。

EdTech(AI)教材として、中学は『デキタス』（城南進学研究社）、高校では『スタディサプリ』及び『スタディサプリ English』（リクルート）を活用し、「2023 年度学校評価」において、個別最適な学びに対する達成度として、生徒 80%、教員 91%となり、自己調整学習が定着した。校務運営システム『BLEND』を導入し、学習進捗状況を一元管理できる LMS (Learning Management System) を構築、学校要覧、「進路のしおり」のデジタル化によるペーパーレス化や大阪市立中央図書館と連携した電子図書館活用によって、ICT 化が浸透した。

タイムマネジメントシート (中学6選抜探究コース)

<月間目標> 期末考査に向けて復習を頑張る <週間目標> 無理に終わらせようとしないのでなく理解できているかを確かめる時間を無駄にしない

科目	単元	学習目標	6月20日	6月21日	6月22日	6月23日	6月24日	6月25日	6月26日	6月27日	6月28日	6月29日	6月30日	自己評価	自己コメント
英語	単語	単語	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	単語の復習を頑張る。単語帳を毎日見ている。
	授業プリント復習	授業プリント復習	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	授業プリントの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	デキタス	デキタス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	デキタスの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
英語	ワークブック	ワークブック	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ワークブックの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	Self-study	Self-study	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	Self-studyの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	デキタス	デキタス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	デキタスの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
英語	新中間	新中間	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	新中間の復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	計算	計算	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	計算の復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	授業プリント復習	授業プリント復習	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	授業プリントの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
英語	小テスト復習	小テスト復習	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	小テストの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	くり算	くり算	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	くり算の復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	間題集	間題集	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	間題集の復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
英語	便覧(語句)	便覧(語句)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	便覧(語句)の復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	デキタス	デキタス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	デキタスの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	対策プリント	対策プリント	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	対策プリントの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
英語	デキタス	デキタス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	デキタスの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	サイエンスワーク	サイエンスワーク	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	サイエンスワークの復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	保健体育	保健体育	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	保健体育の復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
英語	技術・家庭科	技術・家庭科	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	技術・家庭科の復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	健徳体育	健徳体育	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	健徳体育の復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。
	技術・家庭科	技術・家庭科	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	技術・家庭科の復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。

テスト範囲
英語
ワークブック
p99~112

今日の課題が残ったものは明日の朝にしたいと思います。

今日は課題が全部終わったのでよかった。明日も勉強頑張ります。

明日の放課後の勉強頑張りたいと思います。

先週頑張ってできたので、書くのを怠りません。理科も勉強頑張りたいと思います。

国語の課題ができなかったのですが、明日しんどいですが頑張りたいと思います。

国語の復習を頑張る。わからないところは先生に質問する。

火曜日から期末考査、落ち着いて臨んでほしいです。頑張ってください！

※ 基本的には、毎時間授業内で教科担当者が学習計画シートを書かせて下さい。
※ 一例として終わった課題は○、途中の課題は□、終わっていないものは×をつけています。

図1 タイムマネジメントシートを用いた自己調整学習

グローバル化に対応するカリキュラム・マネジメント

新設のグローバル選抜探究コースは、週 10 時間以上の英語の授業、ネイティブとの 2 人担任制、英語イマージョン授業（英語＋プログラミング、音楽、家庭科等）等を実践している。中高大連携の「グローバル探究キャンプ」、マリスタ国際学校と文化交流、深圳のオックススタンド高校、徳琳高校とオンライン文化交流や文部科学省の『第 5 回 GIGA スクール特別講座～GIGA は国境を越える～』における『イタリア大使館につながりたい！』に参加した。中 1 終了段階で CEFR 対応におけるリスニングでは 9 割以上が A2（高校中級程度）となっている。中 3 は沖縄、高 2 普通科はセブ島、高 2 と高 3 音楽科はウィーンで研修旅行を実施し、中高全学年で文楽を鑑賞、日本の伝統文化の発信を行った。文化祭、体育祭は近年で最多の来校者を記録、春の選抜高校野球大会では甲子園で大会歌『今ありて』を合唱した。高大連携はサービスマーケティング、中高新入生に対し、図書館ツアーを実施した。関西国際大学の保健医療学部、教育学部、社会学部との連携を強化し、『関西国際大学進学プロジェクト』を実施、過去最多の 14 名が入学し、「選択保育」（高 3 選択）で関西保育福祉専門学校と連携した。教育シンポジウム『100 周年記念事業 関西国際大学進学プロジェクトー輝く未来への導きー高大連携による生徒の才能と可能性への探究ー』を開催した。探究活動については、『Ring』（リクルート）はじめ、全国レベルのイベントに参加し、学習履歴とするだけでなく、千葉県立安房高校との探究交流を行った。不登校（気味）の生徒を対象にした「KOKO ROOM」（学習支援室）とカウンセラー常駐のカウンセラールームを活用し、改善率（登校できる日数が増加し、EdTech による授業に参加でき、定期考査や卒業考査を受験、進級もしくは卒業できる）2 年連続で 90%以上となった。クラブ活動は加入率が 90%を超え、3 年連続で増加、文武両道が定着した。強化クラブの実績として、出場者総数は陸上競技部が全国大会 51 名、卓球部が全国大会 17 名、吹奏楽部は県大会に 46 名、アーチェリー部は 2 年連続で全国大会に出場した。スポーツを併設したデータサイエンス部は 29 名から 51 名に増加し、全国大会に出場した。広報部は 19 名から 33 名に増加し、歴史的建造物公開で選ばれた『神戸モダン建築祭』においてナビゲーターを務めた。大学進学率 80.0%は 2 年連続増加で過去最高、進学率 97.0%となった。校内予備校「山手アドバンスゼミ」を年間で実施した。生徒確保に向けた取り組みとして、学習塾（1,000 教室以上）と中学校（200 校以上）への訪問を年 6 回以上行った。外部講師による研修や管理職による指導・助言を盛り込んだ。学習塾対象説明会、オープンスクール、学校説明会、入試相談会、教育講演会、プレミアム説明会等は、年間で 52 回実施した。ホームページの新規来訪者総数は 82,794 名

であり、前年より 9,582 名増加した。インスタグラムを 30 件配信した。中学入試は、適性検査型入試、自己アピール方式入試、英語重視方式入試に加え、自己アピール方式にプログラミング入試を導入、入学者は前年比 131.8%、2 年連続増加した。

2. 2. 学校評価との関連

2021 年度以降、学校評価は年 2 回実施している。設問は 40 問あり、「わからない・無回答」を除いて「ややあてはまる」及び「あてはまる」と答えた割合を達成率としている。2023 度を振り返ると、全体（第 1 回、第 2 回）の平均達成率は 82.4%であり、内訳は生徒 72.9%、保護者 77.0%、教職員 93.7%であった。特記事項として、2022 年度より事業計画に示した「進路満足度 100%」の達成状況について、生徒（95.3%）及び保護者（95.9%）の評価が前年をさらに上回り、2 年連続で 90%以上となった。2023 年度の第 1 回目と比較すると、生徒・保護者・教職員からの評価で「要改善」は皆無となり、2022 年度の第 2 回目（年度末）と比較しても、生徒・保護者・教職員からの評価で「要改善」は皆無である。保護者のアンケート回答率が 2021 年度の第 2 回目（53.1%）、2022 年度の第 2 回目（73.4%）であったが、今回は 88.0%以上となり、3 年連続で増加した。「読書教育」については、朝読の質を見直し、「読む」習慣を再構築、ビブリオバトル、関西国際大学の図書館ツアー、電子図書館、読書講演会等を実施した結果、改善が見られた。

課題と対策を総括すると、全体を通して前年同様、生徒・保護者と教職員の評価に大きなギャップが見られる。カリキュラム・マネジメントを推進する中、2024 年度はコース、学年、教科がより教科横断的取り組みを行うだけでなく、全教職員が現状を把握した上で、ワークショップを盛り込み、OJT（On the Job Training）を通じて資質向上をはかる。授業における「きめ細やかな指導」（生徒 61.6%、保護者 63.7%、教職員 97.6%）については、コースコンセプトに基づき、個別最適化された自己調整学習を定着させるために、タイムマネジメントシートの活用とリフレクションアワーを通じて、コース、学年、教科、担任と保護者が連携を密にして学習内容の定着をはかる。授業における「質的向上」（生徒 72.5%、保護者 65.4%、教職員 100%）は、定期・模試分析会、大学入学共通テスト勉強会に加え、年間 2 回、（公開）研究授業を実施、授業満足度アンケートで授業改善を行う。授業における「探究活動」（生徒 67.0%、保護者 63.8%、教職員 95.3%）は、新設した「探究教育推進委員会」を中心に内外での取り組みを強化する。「SDGs と社会貢献」（生徒 70.4%、保護者

66.0%，教職員 90.7%は、探究学習の中でシラバス化して生徒の意欲・関心を高めていく。生徒指導における組織的対応（生徒 61.2%，保護者 75.9%，教職員 97.7%），基本的生活習慣（生徒 76.7%，保護者 68.7%，教職員 88.1%）は、生徒指導と学年の連携をさらに密にすることによってより初期指導を充実させる。「生徒会活動」（生徒 62.7%，保護者—，教職員 79.1%）は、年々、活発化しているが、さらに生徒の「主体的・対話的で深い」活動が展開されるよう指導していく。「人権教育」（生徒 69.7%，保護者 77.0%，教職員 93.0%）は、人権委員会、学年、教科が協働してさらに取り組みを進めていく。私学の独自性における「建学の精神」（生徒 71.9%，保護者 65.5%，教職員 88.4%），「愛校心」（生徒 69.2%，保護者 79.6%，教職員 93.0%）は、100周年記念事業を契機に、学院のミッション及び建学の精神を様々な教育実践の中に落とし込んでいき、必要に応じて、「施設・設備」（生徒 68.0%，保護者 79.9%，教職員 81.0%）の充実を図っていくことにした。教学面は、生徒確保、学力保障、進路保障、設備面は安心・安全が前提であり、入学（入口）、教育内容（中身）、進路（出口）の三位一体改革を進め、財政を安定させ、良循環型の学校経営に資するべく、中長期にわたる事業・財政計画を策定するのが共通項である。

2. 3. カリキュラム・マネジメント・ストラテジー—英語教育を事例にして—

2. 3. 1. 大学入試問題の変容

学習指導要領の改訂と併せて、大学入試問題の変容にも着目しておかなければならない。かつての大学入試センター試験の英語は、筆記 200 点、リスニング 50 点であった。筆記の割合は 8 割であり、知識問題としての音声・語彙・語法・文法、読解問題としての小説における登場人物の心情の変化、論説文における筆者の主張の読み取るものが主流を占めていた。しかし、2021 年度から導入された大学入学共通テストでは、リーディング 100 点、リスニング 100 点になり、コミュニケーション力重視の作問にリニューアルされた。リーディングは文字通り、読解問題のみとなり、読み手をコミュニケーション場面の主体とみなし、「あなただったら…」と直接、問う傾向が散見される。Situation は多岐にわたり、書籍、ウェブサイト、案内文、記事、ブログ、雑誌など、多様な vehicle を通して you が登場する。実践的な対話場面の中で、どのくらい英語を使えるのかが測れるようかなり工夫がなされている。リスニングは、第 1 問～第 2 問が 2 度、第 3 問～第 6 問は 1 度しか読み上げられない。イラストやグラフ、表が多く使われており、目的に応じた思考力・判断力が問われている。

ること、また、アメリカ人だけでなくイギリス人や日本人と思われる話者が含まれていることなど、よりリアリティーのある設定となっている。状況を把握し、聞き取る内容を焦点化、音声情報と図・表・グラフと関連づけて正答を選ぶという認知プロセスは、一定のトレーニングを積まなければ得点化しにくくなった。ただし、国立大学の個別試験は、配点のウェートが高い従来の読解問題が中心である。設問を見ても、内容説明や和訳、空所補充、語句のパラフレーズや整序、一致問題等になっている。

2. 3. 2. カリキュラム・マネジメントの前提

勤務校のカリキュラム・マネジメント、特に、英語教育については先達の知見を参考にしながら指導・助言することになっている。生徒の学習に対する動機づけは、教師が *teacher* であるのと同時に、*facilitator* であることを強調し、学習者エンゲージメントという概念を活用している。これは、学習者が懸命に勉学に取り組む状態のことであるが、*Engaging Language Learners in Contemporary Classrooms* の著者である Sarah Mercer と Zoltán Dörnyei は、成長できると信じて前向きに取り組める自己肯定的イメージをもつこと(自律性)、信頼関係を築き、共感的理解(ラポール)で生徒を受容すること(有能感)、ポジティブな学習集団と教室文化を形成し、生徒間の心的距離を縮め、協働的な学びによって集団の成功体験を醸成すること(関係性)を挙げている。

学習指導要領には、「授業は英語で」が標榜されている。コミュニケーションツールとして英語を指導する場合、生徒が英語を使える環境を提供するのが授業者の責務であるが、だからといって英語しか使ってはいけないということではない。英語の指導といってもその範囲は、音声、意味、形態、統語、文化理解など多岐にわたる。従って、授業内容によって指導法にバリエーションをつけなければならない。例えば、抽象度の高い日本語を英訳する場合、英語だけで日本語の文脈が完全に理解できる生徒ばかりではない。到達度によって、日本語を介して解説した方がよい場合もある。大切なのはバランス感覚である。2つの言語を交互に切り替えながら、それぞれを効果的に用いるトランスランゲージングと呼ばれる指導法がある。これは2つの言語を交互に切り替えながら、それぞれを効果的に用いる従来の日本語を用いた指導法のことであるが、母語リソースを積極的に活用することも尊重すべきティーチングメソッドと位置づけている。例えば、語彙やフレーズを確認する際、生徒から日本語を引き出し、理解しているかどうか確認する、英語とのニュアンスの違いに触れてナチュラルな英語に修正するといった作業で母語の活用が効果的に

機能していることは自明である。生徒同士の学び合いの場合、覚えた単語を会話で使ってはみたものの、他の生徒に伝わらなかったため、部分的に日本語で補足することで円滑なコミュニケーションが成立することもある。「英語で英語」の場合でも、板書やハンドアウトに日本語を織り交ぜたりすることで生徒の言語レパートリーを最大限に活用した取り組みになり、それが論理的思考力を鍛え、多文化理解に直結していくのである。

現実的な問題として、一文の意味はとれても、テキストが何を伝えようとしているのかよくわからないという生徒は多い。和訳ばかりに気を取られていると、記述されていることをイメージして捉え、全体像を把握することができなくなってしまうことがある。可能な限り、和訳に依存しないリーディングができるようになるには、語彙認知、背景知識にアクセスして意味を推測する力に加え、文構造の分析力を強化し、英文を読み進めるうちに自然体で内容が想定できるようになり、統語解析処理を自動化することが求められる。そこで重要となるのが教材選択である。テキストが生徒の語彙サイズを超えると読解過程でワーキングメモリーを使い果たしてしまうため、難しいと感じるのは当然のことであり、全文和訳に頼ってしまいがちになる。教師が生徒の到達度に合わせたつもりでも生徒からしてみれば難しく感じる、また、その逆も起こり得るのである。そこで極力、生徒が「易しい」と思えるテキストを採択することになっている。易しい英文を大量に読む練習を重ねることが訳さなくても読めるようになることを強調している。授業デザインのポイントとしては、情報処理能力とそれを土台にした表現力もさることながら伝えたいという意欲の向上と話し手が頭の中で情報を言語化する習慣化を大切にしている。相手の理解度を高めるために 1 枚の絵を使ったり、図や表にまとめる情報転移 (information transfer) など、多様なツールを用いている。

英語が得意でないという生徒にどの分野に課題があるのか尋ねると、文法という答が大半を占める。日本では、脈々と受け継がれる 5 文型を基本とする学習英文法が独自の体系を構築し、学校現場に定着しているが、時代の変遷とともに、参考になる新たな文法理論が提案されている。勤務校では生徒の興味・関心を引き、「スムーズに頭に入ってくる」ものなら何でも積極的に活用するよう助言している。例えば、語彙の本質的な意味から文法を説明しようとするレキシカル・グラマーがその典型である。この理論を活用した事例として、to へのアプローチがある。to は「対象に向かって」が元の意味であり、互いに顔を見合わせて、「相対する」イメージと捉えた上で、前置詞に適用させると、face to face が「面と向かって」、dance to the music が「音楽に合わせて踊る」、The

score is 5 to 1.が「得点は5対1です」などの意味が理解できる。また、不定詞に適用させて、I want to become an artist.を考えると、「私は芸術家になるという“行為と向き合う”ことを欲している」→「私は芸術家になりたい」という未来のある行為に向いている状況が理解され、不定詞が「これからする（まだしていない）」未来指向と言われる理由につながる。前置詞の to は空間的に対象に向いており、不定詞の to は時間的な行為に向いているという違いはあるものの、to にはお互いに顔を見合わせて、「相対する」イメージが備わっているのがつかめればインプットが完了するといった具合である。しかし、どんな理論も万能ではない。例えば、I'm glad to see you. (お会いできて嬉しいです)などは、すでに相手と会っているときに用いる言い方であり未来指向ではない。ここでは「あなたに会う」という行為と「相対して」嬉しいという柔軟な捉え方ができることが重要であり、探究学習につながるのである。

学習に意欲がもてず、授業が退屈に感じる生徒はどこにでもいる。そういった倦怠感を打ち破るには、脳を刺激し、感情に訴え、集中力を引く出す授業をデザインすることが肝要である。同時に、モチベーションの維持、生徒との関係性や受動的なクラスカルチャーの構築に向けて、「褒める指導」を加味することを徹底している（西村，八木 2022）。到達度によっては、シラバスに従って進むのではなく、1冊のテキストを年間で繰り返して使用するラウンド制指導を取り入れることもある。「聞く」ことを重視し、一つのテキストを用いて、①英語を聞いて内容を推測、②テキストを見て音と文字を一致、③音読して書き写す、④空所補充、⑤リテリング (retelling) という5ラウンド構成を組み込んでいる。リテリングとは、英文を読んだ後、本文を見ずに、その内容を第三者に語る作業である。テキストを閉じて行うが、相手がまったく知らない内容をわかりやすく伝え、理解してもらうことをねらいとするため、情報を頭の中でいかに整理し、いかに表現するかがポイントになる。生徒の集中度が上がることは言うまでもない。生徒によってはテキストがないと不安になり、なんとなくわかるものの、話すとなると自信がないといった悩みをもつことがある。しかし、この方法で学習すると、内容を推測する力がつく、正しい発音で読める、正確な英文を書ける、文構造の理解を深められる、自分の言葉で伝えることができるなどの効果が期待できる。一つの教材をさまざまな角度から学習させるこの指導法は、語彙や文法の内在化と言語情報処理の能力を高めることによって、教材内容を理解しつつ、4技能をバランスよく指導できるのが特徴である。語彙・語法・文法指導を徹底した上で、タスクを与えていくうちに、内容理解が行われ、和訳にとらわれなくなる。生徒が異なれば、到達度に合わせ

た個別最適な学びは AI だけに依存するものではない。教える側は常に創意工夫が求められるのである。

2. 3. 3. 語彙力強化の前提

英語を読んでいて未知語があれば類推する必要がある。そのためには、語彙力の強化に加え、文脈から正しい意味を推測するスキルを身につけなければならない。文章を理解するということは、テキストとの相互作用の中で、読み手の心の中に一貫性のある意味世界となる心的表象 (mental representation) を作ることである。そのメカニズムをモデル化したものが、文字入力→単語→文→パラグラフ→文章という段階を経て処理されるボトムアップ処理、背景知識やテキスト構造の知識を利用して単語や文を理解するトップダウン処理ということになるが、実際には、両者の相互作用により心的表象が構築されていく。

語彙について Batia Laufer (1989) は専門性の高いテキストが読めるようになるにはテキストカバー率 (学習者が知っている既知語の割合) が 95%以上必要と指摘している。Hirsh and Nation (1992) は、95%のカバー率を得るには 4,000 語のワードファミリー (基本形、屈折形、短縮形に派生形を含めて 1 語とする数) が不可欠と述べている。英語の母語話者は高校卒業時点で平均 60,000 語 (George A. Miller, 1991) の語彙サイズと言われているが、実際のコミュニケーションでは、語彙が文法的なルールに従って組み合わせられて情報となり、相手に伝わっていく。学習指導要領の改訂で、中学の教科書で覚えるのが約 1,600 語～1,800 語程、高校の教科書で約 2,000 語～2,500 語程度となったが、大学受験に必要な語彙数は、一般的に約 4,000 語～6,000 語と考えられている。様々な研究結果を俯瞰しつつ、専門書の一応の読解が可能になるには語彙数にして 4,000～5,000 語の習得が第一段階、自力で読解を楽しめるようになるには 8,000～9,000 語のマスターを第二段階としている²⁾。

語彙は、脳科学ではメンタル・レキシコン (mental lexicon) と言われ、心的語彙、心内語彙、心的辞書などと訳されているが、適切な使用に際し、どのような音素の組み合わせから構成されるかという音韻情報 (phonological information)、どのような意味に対応するかという意味情報 (semantic information)、どのような形の構成を持つかという形態情報 (morphological information)、文や句を構成する時にどのような規則に従うかという統語情報 (syntactic information) が求められる (Jean Aitchison, 2012)。4 技能のバランスが語彙情報を適切に関係づけるということは言うまでもない。単語やイディオムを知っているだけでは正確なコミュニケーションは成立しないのである。

2. 3. 4. 4技能について

リーディングは、ジャンルによって読み方にバリエーションをつけているが、英文を読みやすくするために、事前に重要な英語と日本語を結びつける活動をしたり、必要な文法や表現をドリル練習したり、オーラルイントロダクションやフラッシュカードを活用して授業をスタートしている。クラスサイズや到達度にもよるが、読む目的を決めた上で、評論文なら精読、多読や速読なら到達度に合わせた物語といったような具合である。Pre-Reading では「読む前に読んでいる」状態にするために、テーマに関する簡単な背景知識を与え、関連語句を黒板に書きながらスキーマを活性化する³⁾。学年によっては事前に教材自体をタスク化しておき、reading for information の活動に入り、英文を読んでその内容にしたがって絵を描き、色を塗る read and draw、英文を読んで、その見出しを選択肢の中から選ぶ read and match、挿絵の間違いを指摘する read and correct 等々も試みる。スキーマとは、人間の長期記憶に蓄えられた過去の経験や出来事についての知識のことである。例えば、give という動詞なら「与える人」「受け取る人」「何を」という三つの情報が必要である。しかし、それは骨組みに過ぎず、「誰が、誰に、何を」が決まっているわけではない。実際のコミュニケーションは、相手から発せられた情報について、それぞれがもっているスキーマを駆使しながら内容理解に行きつく。要するに、経験値を利用して次に起こる状況や行なわれるべき行動を予測するのである。いずれにしても、長期記憶にある関連情報を最大限に活用しながら文を考えていく姿勢を身につけさせるようにしている。

実践的な指導として、英語を語順のまま前から読み、理解する直読直解を目途に、同時通訳のトレーニングの一つであるサイトトランスレーション (sight translation) を活用している。これは意味のかたまりごとにスラッシュ (/) を入れ、前から音読し、訳していく作業である。リーディングのスピードだけでなく、リスニング力をあげることで一定の評価を得ている。サイトトランスレーションが有効になるのは、到達度に合ったテキストの場合であり、スラッシュを入れるのはチャンク (chunk) ごととなる。ハーバード大学の心理学者である George Armitage Miller が脳の中に情報を一時的に保持できる人の短期記憶に保持できる情報の単位を意味のかたまりをチャンクと呼び、短期記憶で保持できるチャンクは 7 ± 2 と発表したのが 1956 年である。これは認知心理学の研究の先駆けとなった。2001 年には、米国ミズーリ大学の心理学者 Nelson Cowan がマジカルナンバー4 を発表、短期記憶に保持できる情報の数は 4 ± 1

としている。英語の授業でよくチャンクして読んだり、聴いたりする練習がなされるが、これは短期記憶を長期記憶に変えるためのトレーニングであり、同じ情報を何度も脳に入れる復習を繰り返すことを合意形成している。短期記憶は脳の中に情報を短期的に保持しておく能力であるのに対し、長期記憶は情報を長期的に記憶することである。メカニズムとしては、短期記憶を介して長期記憶が形成される仕組みとなっており、短期記憶をいかに活用して長期記憶にするかがポイントである。チャンクは句や節が目安であるが、絶対的なものではないので、試行錯誤を繰り返しながらマスターさせている。具体的には、時間を決めて、チャンクごとに区切った英文の音読し、その箇所を日本語にする練習を繰り返している。音読は脳の処理速度と関係しているのので、読むスピードが上がれば、読める英文量も多くなる。練習を続けていくとそのうちスラッシュなしでも理解できるようになる。It was A that...のようないわゆる強調構文の場合、「...だったのはAです」のように後ろから日本語にするが、Aの位置にある語句が強調されているのがわかれば「まさにAが...、Aは...だったからです」というように訳してもよいことにしている。

易しい文を速く読むこと、そして、目標とする速度、理解度の設定、テキストの難易度がポイントにした速読を重視している。速読とは、学習者が一語一語の意味を自動的にデコーディング処理(検索処理)することで実現される。それを上達させるためには、文字の認識処理や文法・構文の解析処理の速度をあげることが求められる。単語から句、節へと語句が長くなっても処理できる語を広げられることを目的とし、それが母語話者に近い読みのパフォーマンスにつながると思っている⁴⁾。

大学入試対策や各種検定を意識して、While-Reading では斜め読みして素早く大意をつかむスキミング (skimming) や特定の情報を見つけるために、拾い読みするスキヤニング (scanning) を行っている。スキミングの skim とは「すくい取る→ざっと全体を読み、概要がわかる→斜め読みする」ことであり、要点をすくい取るようにして読むことである。文章全体をつかみ、要約するときには有効である。一方、探す必要のある情報は何かを具体的に特定するスキヤニングにおける scan とは「詳しく調べる→必要な情報を抜き取る→拾い読みする」を意味し、5W1H への対応だけでなく、リーディングの内容真偽にも役立つ。この場合、本文から設問に対応する情報を探す必要があり、先に設問に目を通すのが基本姿勢となる。そして、ポイントとなるキーワードや頻度を表す語をおさえた上で、探すべき情報と対応する箇所を本文から見つけるという手順を踏んでいる。

評論文の基本構造は、One Paragraph One Idea、つまり、筆者の主張は1つの段落に1つ描写されている。頭では理解しているものの、実際の読解となると、複雑な文のつながりに惑わされ、なんども読み直す生徒は多い。そこで、大学入試や各種検定試験など、時間に制約がある場合に備えて、パラグラフの第1文をつないで大筋をつかむなどの工夫をしている。指導法としては、パラグラフの文と文の関係である「A、即ち B」という「言い換え」、「A、例えば B」という「具体例」、「A に対し B」という「対照・対比」、「A、だから B」という「因果関係」などが読み取れば One Paragraph One Idea をつかみやすくなり、パラグラフリーディングに直結すること、その際、ディスコースマーカー（談話標識）と呼ばれるつながり、例えば、A, in short B (A, 要するに B) とあれば「抽象→具体」、A, in conclusion B (A, 結論として B) とあれば、「要約・まとめ」を想定して読み方を意識して内容理解を進めると論理展開が把握しやすく、速読力が向上することを盛り込んでいる⁵⁾。

併せて、品詞に着目させ、未知語を文脈から推測したり、選択肢を選ばせることで考えさせたりする活動も行っている。名詞、形容詞、動詞、副詞のように実質的な内容を示す内容語 (content word) と前置詞、接続詞、限定詞 (a, an, the, your, their など) のように、文法的な関係を示す機能語 (function word) を指導している。読解では、①前置詞があれば、前置詞+名詞は括弧でくくり、文構造が見分けやすくした上で、形容詞句、もしくは副詞句として働いているか判別する、②限定詞があれば、句の終わりにくる名詞までの意味のかたまりが文の中でどのように働いているか判別する、③接続詞 that があれば、後続する文から意味のかたまりを特定し、文全体の中での役割を判別する、④関係代名詞があれば、先行詞の具体説明と考えた上で、後続する文から意味のかたまりを特定し、文全体の中で名詞(先行詞)+関係詞節の役割を判別するなどの読解スキルを無意識のうちに使えるようトレーニングを積んでいる。

和訳先渡しも有効な手段である。これは、授業でテキストを読む前に全訳を渡しておき、予習段階で活用した上で授業に臨ませる、一種の反転学習のようなものである。この方式は和訳を否定しているのではなく、限られた授業時間を有効活用するために、和訳作業を減らし、その分、語彙・概要のインプット、表現取り込みのインテイク (intake)、再生・表現のアウトプットを組み入れ、理解と定着に向けたディスカッションやディベートといった幅広い活動に発展させることを目的としている。授業で生徒は先渡しされた全文訳を参照しながら訳読にかかる時間を削り、多くの英文にあたり、コミュニケーションな活動を増加させている。しかし、到達度の高い生徒とそうでない生徒の間に温度差、

換言すれば、全文訳に頼りすぎるとインテイクが促進されないという点、また、文法事項が理解できているか把握しにくい点、母語の能力や知識を十分に活かすことができない点などの課題は共有している。他方、授業がある程度進み、全体の流れを理解した後に全文訳を配布する和訳中渡しもある。これは英文和訳にかかる時間を短縮し、インテイクを促進する上では和訳先渡しと共通しており、産み出された余剰時間を言語活動だけでなく、生徒の内発的動機を高める効果がある。生徒のモチベーション維持には役立っている。

Post-Reading 活動は意味を考えながらの音読が中心である。教師の英語を聞いて英文を見ながらリピートし、その後、顔を上げて英文を見ないでもう一度音読する read and look up, 覚えて欲しい表現や単語を日本語にしておき、それを英語に直しながら音読練習するオーラルインタープリテーションも多用している。ある程度のレベルに達したら読んだ英文を簡単な英語で要約させたり、学習したトピックについてディスカッションさせたり、意見を英語で書かせたり、内容把握できているかどうかをリスニング問題 (true or false) に発展させている。流暢な英語の読みができていないかどうかを確かめるためには、wpm の測定が指標となる⁶⁾。母語話者の読む平均的な速さの指標は、読むのが速い、遅いではなく、内容を理解しながら読み終えることを原則としている。wpm が速度のみを測定するなら、「 $wpm = \text{総単語数} \div \text{読みの時間 (秒)} \times 60$ 」で表せるが、ここで言う速読とは、速く読み終えるスピードではなく、内容を正確に理解しながら読み終えることを意味するものとし、正解数を多肢選択式テストとし、「 $(\text{総単語数} \div \text{読みの時間} \times 60) \times (\text{正解数} \div \text{問題数})$ 」としている。

リスニング力を上達させるには、単語やイディオムを知っているだけでは正確な聴き取りはできない。また、カンのよさだけでなんとかなるというものでもない。英語は単語が横一列に並べられた構造になっているが、単なる単語の集合体ではなく、一定の規則に基づく構造となっている。まずは、文レベルの構造が認識できるようになることが自然とリスニング力を強化し、それが長い文章理解にもつながるという考え方をしている。読み聞かせとしてのストーリーテリングも行い、教師は理解しやすいようにチャンクしながら音読するだけでなく、生徒の表情から理解度を推測し、場合によっては簡単な英語でアプローチするよう心がけている。教師が魅力的な話し方で読み聞かせすることができれば生徒の興味・関心は喚起されることは言をまたない。リスニングにおける正確な音声入力を進める上で、聞いている音、読んでいる文の構成を分析し、その特徴から認識を成立させボトムアップ処理とすでに持っている知識や経

験を活性化して新情報の処理に役立てるトップダウン処理の相互作用を意識して指導している⁷⁾。

ライティング指導は、ディクテーションを基本としている。ディクテーションとは書き取りのことであるが、いろいろなやり方が展開されている。オーソドックスなものは教師が読み上げた英文を直接、聞いて書き取る。教師はチャンクごとに区切って読み、文章の切れ目にポーズを置くなど、書き取りやすくなるよう工夫を重ねている。文章を読み終えた後、状況に応じて生徒が訂正や修正ができるようもう一度、全体を読み上げる指導もしている。ディクテーションの採点は、通例、正確に書かれていれば1語1点として合計点を算出するが、全体の語数が多いときには、【(全体の語数-誤りの数)÷全体の語数×100】で計算している。テキストにない余分な語が書いてあり、語順に誤りがあれば減点対象とするが、スペリングの誤りは判読できれば原点しないといったような配慮もする。ディクテーションをテストの一環として行った場合は公正公平が原則であるが、授業の一環として行う場合はPardon?と聞き返す、Excuse me.と繰り返しをリクエストすることを許可することもある。生徒の到達度によってはテキストの一部を空所にしておき、書き取らせ、数回、テキストを読み上げ、途中で重要な語句を板書してヒントを与え、内容をできるだけ忠実に再現するディクトコンポ (dictocomp) も活用している。応用的なところでは、教師がテキストを2度読み、生徒はポイントとなる語句を書き留め、それらを基に英文を再生するディクトグロス (dictogloss) を実践している。

ライティングの研究には、「書く」という行為に焦点をあてたものと頭の中でどのようなメカニズムが働いて思考したことが文章化されていくのかという心的プロセスを扱うものがある。補助手段として、定型表現やコロケーションといった語のまとまりをチャンクとして処理できるようになることに力点を置き、文レベルのスキルを高めている。日常で使われている言葉の例を大量に集めた、言語のデータベースとも言えるコーパス (corpus) を通じて様々な場面でどのような言い回しがされているのかを学び、結びつきやすい語をセットで覚えておくとネイティブのリズムに近づける。コーパスを利用した学習と言えば、コロケーション (collocation) が想起される。コロケーションとは「強い雨」は strong rain でなく heavy rain , 「罪を犯す」は make a crime でなく commit a crime などのように、一緒に使われる語のつながりのことであるが、今では生成 AI がカバーしてくれる。外国語としての英語を学ぶ場合、学習者の思考を言語化する過程において認知に負荷がかかりすぎでしまうと停滞するのは自明である。従来の研究では、発話思考法、直接観察、書き手の

追観、書かれた作文の分析、ビデオ・モニタリング等のいずれか、あるいは複数の手法を組み合わせるのが一般的であった。近年ではコンピュータプログラムに着目したデータ収集を行うなど、様々な工夫が重ねられている。外国語として英語を学ぶ場合、母語話者と比べると、使用頻度が少ないことは言うまでもない。従って、思考を言語化していく過程で、文法に基づく処理を行うだけでなく、ストックされた定型表現を活用することによって負担を軽減できるのもまた事実なのである。作文が借文と言われる所以である。

文と文のつながりとなる結束性 (cohesion) がパラグラフとなり、さらにそのつながりが一貫性 (coherence) をもったテキストを構成する。結束性が文法的、語彙的手段によって示される表面的な結びつきであるのに対し、一貫性は表面上には現れず、話者同士が共有する文化的、社会的な知識などを通して文脈論理を関係づけるものと言える。その意味で、コミュニケーション力における流暢さの違いはその温度差から生じると言える。英語に限らず、どんな言語であっても旧情報を代名詞で表したり、反復する語句を省略して繰り返しを避けたり、他の語に置き換えたりといった特性がある。温度差を埋めるためには結束性、つまり、情報の連続性となる文のつながりや語彙的連鎖による文を超えた意味のつながりに習熟しなければならないのである⁸⁾。

リーディング活動と結びつける意味でサマリーライティングを推奨している。学習した内容のポイントとなるところだけをまとめるタスクであるが、目的に応じた分析ができるようになり、自由英作を盛り込むとインタラクティブな活動に発展する。到達度が上がるにつれて、なるべく自分の言葉で表現するように指導している。実際の授業では、リーディングとサマリーライティングを統合してグループ活動を行い、生徒同士でチェックしあうという方法を採用している。生徒に発問内容と形式のサンプルを提示しておくと比較的スムーズな展開となるが、自由英作を組み込むよう配慮し、学習者中心の授業を心がけている。サマリー作成において、多くの生徒が本文の英語を使用するが、到達度が上がるにつれて main idea はなるべく自分の言葉で表現できるようになることを目標に、同意語への書き換えや品詞転換する (paraphrasing)、簡略化する (simplifying)、複雑な文を二文に分ける (decomposing)、一文にまとめる (compounding)、難しい表現は一般化する (generalizing)、補足説明や文意を明確にする (elaborating) などのスキルを指導し、エラー分析 (Error analysis) を重視している。エラーとは、生徒が学習した文法が目標とする言語の文法と異なる時に見られる現象であるが到達度を示す鏡とも言える。誤りを分析・研究することは学習ストラテジーに直結する。エラーには、首尾一貫したものの、言語間の

違いによるものなど、様々な状況がある。首尾一貫したものは、誤りを訂正されても適切に修正できない場合、また、誤りを修正してもまた同じ誤りを繰り返してしまう場合のことである。生徒は自分なりの体系を作ってしまうため、指導されてもすぐには修正しにくいものである。言語間の違いによるものとは、母語の干渉が最たるものであり、文法力の裏返しとも言える。例えば、不規則動詞を規則動詞と取り違える、語法を類似するものに置き換える、母語の干渉によって不適切な言い方にしてしまう、適切な語彙を知らずに別の表現法に言い換えてしまうなどが考えられる。目標言語でも母語でもない生徒が使う言語は、中間に位置するという意味で、中間言語 (interlanguage) と位置づけられているが、目標言語の修得は発達段階と多くの類似性があり、生来的なものであることを肝に命じて指導にあたっている⁹⁾。

スピーキング活動の一環としては、英文を読んだ後、本文を見ずに、その内容を第三者に語るリテリング (retelling) を行っている。相手が知らない内容をわかりやすく伝え、理解してもらうことがねらいであるから、英文の情報を頭の中でいかに整理し、いかに表現するかがポイントになる。日常生活に置き換えてみると、学校での出来事を家に帰ってから家族に話すのと同じである。最大のメリットは、思考→判断→表現することによって内容理解がより深められることである。英語学習で言えば、まとまりのある英文を読み、リテリングを行うとスピーキングにつながり、逆に、リテリングを聴くことがリスニングにつながるという相乗効果も期待できる。自分の言葉で伝えようといくら言っても、表現力が乏しければリテリングは成立しない。そこで、初期指導では教師自らがモデルを示し、理解や記憶の確認を促し、発話しやすくなるような環境を作ることで再生 (recall) と再認 (recognition) に結びつける。リテリングの強みは、本文の情報を伝えるだけでなく、手の背景知識を統合して状況全体が表現されることである。

スピーキング活動は、学習者の到達度や目的に応じた場面を設定し、その中で適切な表現を用いた活動を体験させることでスキルの向上をはかることをねらいとしている。生徒の学習に対する基本的な姿勢としては、日頃からメッセージを英語で相手に伝える取り組みを増やし、自然体の中で、流暢さとともに正確に英語を使いこなす習慣をつけることである。正確さの定義を発音、語彙、語法、文法、ディスコース構成などを操作できるようになることとし、教師の姿勢としては、コミュニケーションを円滑に行うための方法を気づかせた上で、適切なフィードバックを与えて自己調整できるようファシリテートすることを求めている。

スピーキング活動は、正確さ (accuracy) に重きを置くもの、流暢さ (fluency) に重きを置くもの、そしてその中間にあたるものという3つのタイプに分けられる。それぞれ①ドリル (drill)、②プロダクション (production)、③プラクティス (practice) と呼ばれる。①は形重視、正確かつスピーディーな模倣による反復練習を通じて、新出の文法や文型を含む文を再生できるようにする活動である。言語学習ではドリル練習は不可欠であるが、これは受け身的であり、機械的な作業になりがちのため、単純で容易なものにするなど、学習者が積極的に参加し、短時間で十分な練習量を確保できるよう工夫しなければならない。②は内容重視、到達度の高いクラスや学年で実施するのが通例であるが、学習の初期段階からでも動機付け (motivation) になるのでやり方次第では有効な手段になり得る。③はコミュニケーション重視を前提とするものの、活動に必要な語彙や表現は予め練習を積んでおくことが必須である。①と②の橋渡しとも言えるものである。初級のレベルではこれがスムーズに行えるようになることを当面の目標としているが、正確さと流暢さをバランスよく組み込むことが大切なのである。いずれにせよ、スピーキングが①自分が発言したい内容をまとめること (conceptualization)、②言語化 (formulation)、③言葉を一時的に蓄える緩衝記憶 (buffer)、④音声化 (articulation)、⑤音声をモニターするフィードバック (self-monitoring) という5段階を経て実現されるものであるが、それを豊かなものにするが状況に応じて適切な表現を選択する社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)、談話的能力 (discourse competence)、背景知識、論理的思考力などであることを強調している。

2. 3. 5. 評価方法

グローバル選抜探究コースの英語の到達目標は、CEFR でいうと、中学卒業段階で A2 レベル、高校卒業段階で B2 レベルを設定している。学年の進行イメージは、中1～2を「第1ターム：習得」、中3～高1を「第2ターム：活用」、高2～3を「第3ターム：探究」とし、卒業後の進路としては、国公立、有名私大、もしくは海外の大学への進学をめざしている。評価方法は、5段階評価と併せて、英語は学習到達度について表を用いて測定するルーブリック評価を活用している。

ルーブリック (読む) ()年()組 ()番 名前()

	A	B	C	評価
<p>関心・意欲・態度 Interest, Motivation and Attitude</p>	<p>外国語の背景にある文化や書き手の意図を主体的に理解しようとする姿勢が見られる。 You demonstrate a willingness to actively understand and learn about the culture and the writer's intentions behind a foreign language, and to form your own opinions.</p>	<p>外国語の背景にある文化を主体的に理解しようとする姿勢が見られる。 You have a proactive attitude towards actively understanding and learning about the cultural context behind foreign languages.</p>	<p>外国語を読むことを通じて、必要な情報を得ようとする姿勢が見られる。 You have an attitude of seeking necessary information through reading English texts.</p>	
<p>思考・判断 Thinking and Decision-making Ability</p>	<p>社会的な話題について、情報が見つけやすくなるまで、要領を正確に読み、要領を正確に、かつ迅速に理解し、自分の考えを形成することができる。 You can read English texts on social topics, accurately and quickly understand the main points without needing assistance, and form your own opinions.</p>	<p>社会的な話題について、情報が見つけやすくなるまで、要領を正確に読み、要領を正確に、かつ迅速に理解し、自分の考えを形成することができる。 You can read English texts with clear information on social topics, comprehending the overview and key points without requiring much assistance.</p>	<p>社会的な話題について、情報が見つけやすくなるまで、要領を正確に読み、要領を正確に、かつ迅速に理解し、自分の考えを形成することができる。 You can understand the necessary information from English texts that present clear information on social topics.</p>	
<p>表現力 Expressive Ability</p>	<p>文章を流暢に、かつ相手に伝わりやすいように音読することができる。文章に込められた感情を正しく理解し、音読の際に適切に表現することができる。 You can read texts aloud fluently and accurately with correct pronunciation. You have a correct understanding of the emotions conveyed in the text and can express them appropriately during the oral reading.</p>	<p>文章を流暢に、かつ相手に伝わりやすいように音読することができる。文章に込められた感情を正しく理解し、音読の際に適切に表現することができる。 You can read texts aloud fluently and accurately with a certain degree of fluency and pronounce them in a way that is comprehensible to the listener. During oral reading, you make an effort to express the emotions conveyed in the text.</p>	<p>学習者向けに書かれた文章をある程度ゆつくりであれば音読することができ、文章に込められた感情を理解することが、それを表現することがやや不十分である。 You are able to read aloud texts written for learners at a somewhat slow pace. While you understand the emotions conveyed in the text, your expression of those emotions is slightly lacking.</p>	

ルーブリック (聞く) ()年()組 ()番 名前()

	S	A	B	C	評価
<p>関心・意欲・態度 Interest, Motivation and Attitude</p>	<p>自然な早さで話された社会的な話題について、興味や関心を適切に示している。また、アイコンタクトも欠かさず見られる。You appropriately show interest and concern for social topics spoken at a natural speed. Additionally, you maintain eye contact and demonstrate a willingness to listen.</p>	<p>社会的な話題について、興味や関心を適切に示している。また、アイコンタクトも欠かさずに聞こうとする姿勢が見られる。You demonstrate appropriate interest and engagement in social topics. Additionally, you maintain consistent eye contact, showing an attentive listening posture.</p>	<p>社会的な話題について、興味や関心を示しつつ、アイコンタクトに五つとめながら聞くことができる。You are able to listen while demonstrating interest and engagement in social topics, while also making an effort to maintain eye contact.</p>	<p>社会的な話題について、相手の話を聞きながら、相手の話に対する興味・関心がやや広わりにくい。You make an effort to listen while looking at the other person during social conversations, but you tend to have a neutral expression, making it somewhat difficult to convey your interest and engagement in the other person's story.</p>	
<p>思考・判断 Thinking and Decision-making Ability</p>	<p>社会的な話題について、短く簡単な説明の要点を正確に聞きとることができる。You can accurately grasp the main points of a brief and simple explanation about social topics.</p>	<p>社会的な話題について、短く簡単な説明の要点を正確に聞きとることができる。You are able to accurately grasp the key points of brief and simple explanations when social topics are spoken slowly and clearly.</p>	<p>社会的な話題について、短く簡単な説明の概要を聞きとることができる。You can grasp the overview of brief and simple explanations regarding social topics when they are spoken slowly and clearly.</p>	<p>社会的な話題について、ゆっくり、はっきりと話されれば、必要な情報を聞きとることができる。If social topics are spoken slowly and clearly, you are able to comprehend the necessary information.</p>	

ループリック (書く) () 年 () 組 () 番 名前 ()

	S	A	B	C	評価
関心・意欲・態度 Interest, Motivation and Attitude	自分の考えや気持ち・その理由などについて、 <u>適切な段落</u> で自ら書くことができる。You demonstrate a willingness to write about your thoughts, feelings, and the reasons behind them in <u>multiple paragraphs</u> .	自分の考えや気持ち・その理由などについて、 <u>自ら書くこととする姿勢</u> が見られる。You have a willingness to express your own thoughts, feelings, and reasons through writing.	自分の考えや気持ち・その理由などについて、 <u>促されれば書くこととする姿勢</u> が見られる。You have a willingness to write about your own thoughts, feelings, and reasons <u>when prompted</u> .	自分の考えや気持ち・その理由などについて、 <u>促されれば書くこととするが、あまり促さなくても</u> write about your own thoughts, feelings, and reasons when prompted, but you <u>tend to give up</u> .	
思考・判断 Thinking and Decision-making Ability	自分の考えや気持ち・その理由などを <u>適切な段落</u> で順序立てて書くことができる。You can write your thoughts, feelings, and the reasons behind them in an <u>orderly manner across multiple paragraphs</u> .	自分の考えや気持ち・その理由などを <u>順序立てて書くことができる</u> 。You can articulate your thoughts, feelings, and reasons in a <u>structured manner</u> .	自分の考えや気持ち・その理由などを <u>順序立てて書くこととするが、一部工夫が必要である</u> 。You attempt to express your thoughts, feelings, and reasons in a <u>structured manner</u> , but <u>some refinement is needed</u> .	自分の考えや気持ち・その理由などを <u>うまく順序立てて書くことができず、読み手にかかる負担が大きい</u> 。You struggle to effectively organize and present your thoughts, feelings, and reasons in a <u>coherent manner</u> , resulting in a <u>heavy burden on the reader</u> .	
表現力 Expressive Ability	社会的な話題について、 <u>Opinion</u> 、 <u>Reason</u> 、 <u>Example</u> 、 <u>Opinion</u> で多様な語彙や文法を用いて柔軟に書くことができる。I can write about social topics using the <u>Opinion</u> 、 <u>Reason</u> 、 <u>Example</u> 、 <u>Opinion</u> structure flexibly, incorporating a diverse range of vocabulary and grammar.	社会的な話題について、 <u>多様な語彙や文法を用いて柔軟に書くことができる</u> 。You are able to write flexibly about social topics, using a <u>diverse range of vocabulary and grammar</u> .	社会的な話題について、 <u>適切な語彙や文法を用いて書くことができる</u> 。You are able to write about social topics using <u>appropriate vocabulary and grammar</u> .	社会的な話題について、 <u>英語のみを用いて書いているが、語彙が限られている</u> 。You write about social topics using <u>only English</u> , but your <u>vocabulary is limited</u> .	

ループリック(話す) ()年()組()番 名前()

	S	A	B	C	評価
関心・意欲・態度 Interest, Motivation and Attitude	自分の考えや気持ち・その理由などに ついての会話を、自ら続けようとする 姿勢が現われる。また、積極的な議論 につながるようトピックや話し方を選 ぼうとする。You show a proactive attitude towards continuing conversations about one's thoughts and feelings, along with their reasons. Additionally, you make an effort to choose topics and speaking styles that lead to <u>substantial</u> discussions.	自分の考えや気持ち・その理由などに ついての会話を、自ら続けようとする 姿勢が現われる。また、アイコンタクト も保っている。You have an attitude of actively engaging in conversations about your thoughts, feelings, and reasons. Furthermore, you maintain eye contact.	自分の考えや気持ち・その理由などに ついての会話を、促されれば続けよう とする姿勢が現われる。また、アイコン タクトも保っている。You have an inclination to continue conversations about your thoughts, feelings, and reasons <u>when prompted</u> . Additionally, you maintain eye contact.	自分の考えや気持ち・その理由などに ついての会話を、促されれば続けよう とするが、あきらめてしまう。アイコン タクトは保とうとする。You make an effort to continue conversations about your thoughts, feelings, and reasons when prompted, but you <u>tend to give up</u> . You attempt to maintain eye contact.	
思考・判断 Thinking and Decision-making Ability	伝える内容を整理し、自分の考えや気 持ち・その理由などを順序立てて話す ことができる。You are able to organize and articulate content, expressing thoughts and feelings along with their reasons in an orderly manner.	自分の考えや気持ち・その理由などを 順序立てて話すことができる。You are able to articulate your thoughts, feelings, and reasons in a coherent manner.	自分の考えや気持ち・その理由などを 順序立てて話そうとするが、二部工夫 が必要である。You attempt to organize your thoughts, feelings, and reasons in a coherent manner, but <u>some refinement is needed</u> .	自分の考えや気持ち・その理由などを うまく順序立てて話すことができず、 聞き手にかかる負担が大きい。You struggle to effectively organize your thoughts, feelings, and reasons, placing a <u>significant burden on the</u> listener.	
表現力 Expressive Ability	目的や場面に応じて、多様な語彙や文 法を用いて論理の構成や題意を工夫し て適切に話すことができる。また、発 音も適切である。You are able to appropriately speak by using a diverse range of vocabulary and grammar, adjusting the logical structure and development according to the purpose and context. Additionally, pronunciation is accurate.	目的や場面に応じて、多様な語彙や文 法を用いて適切に話すことができる。You are able to speak <u>appropriately</u> using a diverse range of vocabulary and grammar, depending on the purpose and context. Furthermore, your pronunciation is accurate.	目的や場面に応じて、適切な語彙や文 法を用いて話すことができる。発音は 適切ではない部分もあるが、聞き手に 負担がかからない。You are able to speak using appropriate vocabulary and grammar, depending on the purpose and context. Although there may be some inaccuracies in your pronunciation, it does <u>not pose</u> a burden to the listener.	目的や場面に応じて、英語の形を用い て話しているが、聞き手が聞き取れ ない。また、発音は適切ではない部分 が多くあり、聞き手に大きく負担がか かる。You speak <u>only in English</u> according to the purpose and context, but your vocabulary is limited. Additionally, there are many instances where your pronunciation is not accurate, placing a <u>significant</u> burden on the listener.	

図2 ループリック評価の実践例

ルーブリックが注目されたのは、学習指導要領の改訂で「主体的で対話的で深い学び」による探究的アプローチが重視されたことによる。従来の評価方法では、探究学習を適切に評価できず、それに代わる新たなパフォーマンス評価が必要であったため、これらの手法が注目されるに至った。ルーブリック評価を導入したことによって、生徒は予め評価基準を知った上で学習しているので自己評価しやすくなり、メタ認知を高める機会を得ることができ、自己調整学習に直結させることができるようになったことが挙げられる。

日々の小テストでは、文章の一部の単語を括弧に置き換え、そこに適する語を入れ、どれだけ復元できたかを測定するクローズテストを多用している¹⁰⁾。外国語としてのテストであれば、7～10語間隔が適当であるが、機械的に括弧を作ればよいというものではなく、到達度によって柔軟な対応が求められる。文脈に対するヒントを与えるために、第1文と最後の文、状況によっては2～3文はそのままにしておくこともある。空所補充の形式もあれば、いくつかの選択肢を用意しておく多岐選択の形式もある。空所補充の採点は、基準を決めた上で、他のテストとの整合を図りつつ、処理する。方法としては、同じ語のみを正解とする *exact-word method* のみを正解とするものを基本としている。答が一つなので、ネイティブのチェックがなくても採点しても、信頼性の高いものである。もう一つが、括弧とした語と同じ語でなくてもコンテキストから正しく意味を伝えるものであれば正解とする *acceptable-word method* も採用している。この場合は、ネイティブ教員と連携して想定される答を事前に検討しておくことになる。選択形式であれば、コンピュータによる採点が可能になるため、EdTech 教材を活用している。クローズテストは、英語を外国語として学習している者にとって、妥当性、信頼性、実用性が高く、採点が容易であるのは事実であるが、何を測定しているかはまだ明らかにされていないという疑問点や限界も指摘されており、テスト理論におけるメリットとデメリットを十分に研究した上で、生徒個々の真の英語力育成に資するものになっている。

2. 3. 6. 生徒・教師の振り返りと気づき

授業記録は学習者が自らを振り返り、改善点を明確にするものである。360度カメラによる録画によって教師と生徒の発言を再現し、生徒個々の授業経験に迫るエスノグラフィ等によって気づきを喚起している。気づきが目標言語の習得や学習に大きな影響を与えることは言うまでもない¹¹⁾。



図3 360度カメラを活用した授業実践

また、様々な作業、実験、調査などの中での状況や感想を学習者に発話してもらい、その内容を記録したデータを基に、思考過程を分析する発話プロトコル分析も取り入れている。この手法は、人間の頭の中で起こっている現象を説明し、人間内部のメカニズムを解明することができるだけでなく、課題を見つけ出すことも可能であるとされている。生成AIが人間と同じような思考ができるコンピュータプログラムを作成できるようになった今、発話思考法を積極的に活用し、コンピュータと人間の思考が比較可能となっている¹²⁾。

教師の振り返りとしては、アクション・リサーチ (action research) を推奨している。これは計画→行動→観察→内省のサイクル、いわゆるPDCAに相当するが、生徒、教材、活動の数だけバリエーションが生まれる。特性としては、教師は自身が実践者であると同時に、研究者であるという意識をもたせることを重視している。ただし、これは教員個々の資質向上に主眼を置いた取り組みであるため、必ずしもデータ分析などの厳密さを求めるものではなく、自己研修の色合いが強いOJT (On the Job Training) ものである¹³⁾。

相対的なテーマとしては、各自が行なった実践を生徒はどう思っているかを検証して指導法を改善する、モチベーションにつながる学習方法とは何かを探究する、学習者にとってさらに魅力的なシラバスにする、指導に関するピループと実践との関係、つまり、学習者主体・教師主体のバランスはどうすべきかを考察するなど、実情に応じた使い方が考えられる。データ収集方法としては、クラス観察、インタビュー、アンケート、録画授業、活動記録、テストの得点

などがあるが、何を改善したいのかという目的を明確にした上で、柔軟に一次資料を集めることを第一義とし、妥当性・信頼性・客観性を高めるために、複数の調査者・データ・手法による triangulation という方法を行っているが、生徒、教材、活動の数だけバリエーションが生まれる。特性としては、授業改善やクラス運営を向上させることをねらいとしているため、自らが調査への参加者であるという気持ちが重視され、教師は自身が実践者であると同時に、研究者であるという意識が前提である。アクション・リサーチは理論の構築をめざすものではなく、文字通り、教師が具体的な行動を起こし、記録したものを体系化、内省を繰り返し、自己の資質向上に努めることがねらいであり、教員個々の資質向上に主眼を置いたもの取り組みであるため、実施の手続きやデータ分析が必ずしも厳密さを求めるものではなく、自己研修の色合いが強いものとしている。

2. 3. 7. 海外ルーツの生徒受け入れに際して

2024 年度、創立 100 周年を迎えた勤務校は、国際都市と言われる神戸にあり、海外にルーツをもつ卒業生を輩出してきた歴史がある。現在でも中国、韓国、フィリピン、ロシア、ブラジル、トルコ、イタリアなど、様々な国からの留学生や転入生が学び舎を共にしている。日本語に十分習熟していない生徒には AI がリアルタイムで翻訳し、世界 93 言語に対応する自動翻訳イヤホンを利用させ、学びを保証している。また、2024 年度の秋からは海外ルーツの生徒の転入を積極的に受け入れている。



図 4 自動翻訳イヤホンを活用した授業実践

その中で、複数の文化接触によってもたらされた文化変容（acculturation）が見られる。個人差はあるが、①周囲の斬新さに喜ぶ、②文化ショックを受ける、③多様性を受け入れ、緩やかに回復する、④新しい文化の中で自己確立という段階を経て成長していくプロセスである。この領域では Schumann の文化変容モデル (Acculturation Model) を参考にしている¹⁴⁾。文化変容モデルは、教室外の自然な言語習得場面で第二言語を習得する場合に適用される。文化変容を決定する要因として、社会的距離（social distance）と心理的距離（psychological distance）があるとされ、2つの距離が大きくなればなるほど第二言語習得は進まず、その距離が小さくなれば学習が促進されるとされている。グローバル化、DX化が進展する今、多文化共生社会の形成に向けて、教室内外でのインタラクションを増やし、そうした言語リソースを用いた社会的な相互作用によって、「自主的・対話的で深い学び」に直結させている。

3. まとめ

平和や社会や多様性を尊重する社会づくりに向けて、国境を越えて存在する地球規模の課題を意識し、主体的に捉え、その解決に向けて行動するグローバル・シティズンシップが求められている。地球市民意識、地球市民性などと訳されている。グローバル・シティズンシップについて議論を深めると、国際関係論、社会学、教育学、政治学、経済学などの文系領域だけでなく、理系領域も加えた、まさに文理融合、教科横断型の学際的なレベルになる。今や国境を越えて市場が拡大している以上、労働力移動を加速化し、結果として、多文化教育の必要性が生まれるのは必然である。その中で、知識基盤型社会を主体的に生きるための専門分野以外の汎用性のある技能（ジェネリックスキル）や持続可能な発展に向けたグローバル・イシューの取り扱いがグローバル・シティズンシップ教育に結びついていくことになる。地球的課題を扱う言語材料として最適なものの一つがSDGs（Sustainable Development Goals）であるが、それぞれの達成目標に向けて、どのように教科横断させ、世界の変革を目指すものにアプローチし、グローバル・シティズンシップを育成していくかが教師の腕の見せどころとなる。テーマは「学校に小さな地球を創ろう！」である。学校教育改革の本格化はこれからである。

注

- 1) https://kobeyamate.ed.jp/about/asset/index/greeting/evaluation2023_2.pdf (2024年9月21日)
- 2) 語彙指導の際、例えば、英語の代名詞 **he** には、人類の意味で使われたり、性別のわからない人を指したりする場合があるが、そのようなことが語の概念を取り違える要因になることもある。結果、自動翻訳ソフトなどが人を男性と学習してしまうと性差別につながる問題が発生、社会に混乱をもたらす危険性があることなどにも言及している。
- 3) スキーマという用語は、イギリスの認知心理学である **Bartlett, F.C.** (1932) によって用いられた。**Bartlett** は、人の記憶について研究し、物語の理解や記憶について読み手がすでにもっている知識に導かれて進行するとした。スキーマ理論では情報の違いを変数、それを埋める記憶の中にある情報をデフォルト値と呼ばれる。課題としては、その範囲や性質が明確にされていない点、スキーマが活性化され、推論が生じるのはどのような条件であるのかが明らかにされていない点などが挙げられる。
- 4) 速読では1分当たりに読める単語数を **wpm (words per minute)** で表している。英語のネイティブは、ふつう **300wpm (Nuttall,C, 2005)** とされているが、人によって温度差もあり、**200~250wpm** とも言われている。
- 5) 物語構造について、**Rumelhart, D.E.** (1975) は、記憶の中に蓄積された知識が意味を構成する際に推論を働かせると述べ、これを物語スキーマと呼んでいる。そして、物語の主要部分を状況 (**setting**) とエピソード (**episode**) に分け、状況は登場人物の置かれた場面、時間等を示し、エピソードは出来事の発生、内的反応 (**internal response**)、外的反応 (**external response**) からなるとしている。パーモント大学コンピューショナル・ストーリー研究所が感情分析を用いて **1,700** 以上のフィクション作品の感情値を計り、データマイニングを駆使することによって、感情曲線には**6**つの軌道があることを発見、それが物語の構成要素になるとしている。**6**つの軌道とは、立身出世物語に見られるような感情値が一定した継続的な上昇型、『ロミオとジュリエット』のような一定して継続的な下降型に加え、下降から上昇型、上昇から下降型、上昇→下降→上昇型、下降→上昇→下降型に分類している。物語の構造については、登場人物、モチーフ、プロット、表現様式によるものなど、類型化による様々なアプローチがある。
- 6) 日本人の場合、**120~150wpm** が必要と考えられているが、**100wpm (slow reading)**、**100~150wpm (normal reading)**、**150~200 (faster reading)**、**200 (rapid reading)** としている事例もある。専門家によって数値に違いが生じるが、テキストの理解が**7**割程度の場合、高校生で**150wpm**、大学生で**200wpm** くらいを目標としている。
- 7) **Brown** は音声を入力し、その意味を理解するとともに、自ら思考、判断する認知作業とし、**8**つの段階を提示している。つまり、①スピーチを聴いて、そのイメージを短期記

憶にとどめ、言語知識や背景知識を活用して、音声の構成要素を意味のある単位として捉え、シラブル（連続する音を区切る分節単位の一つ）の境界を決定、語を特定する。②スピーチのタイプを決定し、知覚したメッセージに解釈を加え、③文脈を読み取り、目的を推測、④スキーマを活性化させ、適切な解釈を施し、⑤入力された音のつながりに意味を与え、⑥発話に意図された意味を与え、話者の内面理解に向けた正確な解釈を行い、⑦情報を短期記憶か長期記憶のどちらに保存するかを決め、⑧メッセージの原型を消去し、重要な情報のポイントだけを保存するというプロセスである。

- 8) Halliday and Hasan (1976) は、結束性を指示 (reference)、代用 (substitution)、省略 (ellipsis)、接続語 (conjunction)、語彙的結束性 (lexical cohesion) に分類している。
- 9) 中間言語の研究としては関係代名詞の習得の順序が有名である。先行詞が目的語で、関係代名詞が主格 (OS) の場合が最もマスターしやすく、先行詞が目的語で、関係代名詞が目的格 (OO) と先行詞が主語で、関係代名詞が主格 (SS) が同程度、先行詞が主語で、関係代名詞が目的格 (SO) という順で難易度が上がる。このような研究成果が文法やライティングなどのテキストを編集する際、有益な情報となっている。
- 10) 米国のジャーナリストである William Taylor によって、Readability を測定するために開発され、新聞読者層に適した文章を作成するために使われていたが、英語を外国語とする学習者にも有効であると考えられている。
- 11) 気づきについては、Richard Schmidt (1990) によって提唱された気づき仮説 (Noticing hypothesis) を参考にしている。Schmidt は、意識の役割を検討し、学習を促進する効果があることを言語化している。気づきに影響を及ぼす要因として「期待」、よく見聞きするもの、目立っているものは気づきやすいという「頻度」、タスクの難易度などによって気づきやすさが変わるという「スキルレベル」を挙げている。また、意識レベルの低いものから順に、「知覚・認知」「気づき」「理解」というレベルに分け、このうち、「気づき」の対象を言語形式だけではなく、社会的特性や語用論などに発展させている。
- 12) 認知科学の領域であり、アプローチの方法は質的なもの、量的なもの、多種多様である。新情報は短期記憶にあり、これをリアルタイムで発話したものが発話プロトコルデータとなる。その意味で、既に長期記憶にある旧情報から再構成したものととは区別される。
- 13) 社会心理学者 Kurt Lewin が提唱したものであり、社会のリアルな問題のメカニズムを研究者と当事者が解明し、改善を試みる取り組みのことである。様々な分野で応用されているが、英語教育分野では教師が自らの成長に向けて、なすべき行動を計画して実行、その結果を観察して、内省 (reflection) し、次につなげるという小規模なリサーチを意味する。
- 14) この領域では Schumann の文化変容モデル (Acculturation Model) が有名であり、これは海外からの移民の第二言語習得研究で注目された。目標言語に対し、一体化したいとい

う気持ちがあれば言語習得は促進されるという仮説であり、Schumann は人が言語そのものを学ぶだけでなく、新しいライフスタイルや思考様式をどの程度、受容したかに影響を受け、結果、文化に適應する度合いが高くなればなるほど、それに應じるようになると言及している。

参考文献

- 安藤昭一 (1991). 『英語教育現代キーワード事典』 増進社.
- 門田修平・野呂忠司編 (2001). 『英語リーディングの認知メカニズム』 くろしお出版.
- 佐野正之 (編著) (2000). 『アクション・リサーチのすすめ—新しい英語授業研究』 大修館書店.
- 高梨庸雄・卯城祐司 (2000). 『英語リーディング事典』 研究社出版.
- 中央教育審議会教育課程企画特別部会 (2015). 『教育課程企画特別部会 論点整理』.
- 西村和雄・八木匡 (2022). 「褒め方、叱り方が子どもの将来に与える影響—日本における実証研究」 独立行政法人経済産業研究所編『RIETI』, 1-18.
- 西村和雄・八木匡 (編著) (2024). 『学力と幸福の経済学』 日経 BP 日本経済新聞出版.
- 日本私学教育研究所 (2024). 『新学習指導要領と私学(2)—2023 年実施 全国私学アンケート調査結果と分析—』.
- 平井正朗 (2015). 「私立中高におけるエンロールメント・マネジメントの効果—学校評価との関連」 国際教育学会編『クオリティ・エデュケーション』, 7, 105-131.
- 平井正朗 (2017). 「教員の自律的参画と授業改善を志向するカリキュラム・マネジメントの試み」 国際教育学会編『クオリティ・エデュケーション』, 8, 53-76.
- 平井正朗 (2020). 「カリキュラム・マネジメントの体系化に関する継続的研究—アダプティブ・ラーニングの試み」 国際教育学会編『クオリティ・エデュケーション』, 10, 37-59.
- 平井正朗 (2021). 『英文法嫌いの生徒がみるみる変わる！平井校長の英語の仕組み探究講座』 三省堂.
- 平井正朗 (2022). 「個別最適化に向けてのカリキュラム・マネジメント—EdTech 教材を活用した場合」 国際教育学会編『クオリティ・エデュケーション』, 12, 49-67.
- 平井正朗 (2023a). 「実践的カリキュラム・マネジメントの高度化及び体系化—個別最適な学びと協働的な学びの創出に向けて」 国際教育学会編『クオリティ・エデュケーション』, 13, 107-126.
- 平井正朗 (2023b). 「学校経営ストラテジーの再構築—神戸山手女子中学校・高等学校を事例にして—」 関西国際大学教育総合研究所編『教育総合研究叢書』, 16, 201-211.
- 平井正朗 (2024). 「学校経営ストラテジーの再構築 II —高大連携に向けてのカリキュラム・マネジメント—」 関西国際大学教育総合研究所編『教育総合研究叢書』, 17, 197-209.
- 文部科学省 (2018). 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告知)』.
- 米山朝二 (2003). 『英語教育指導法事典』 研究社.
- Aitchison, J. (2012). *Words in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon*, 4th Edition,

Wiley-Blackwell.

Miller, G. A. (1991). *The science of Words*. W H Freeman & Co.

Halliday, M. A. K., & Hasan, R. (1976), *Cohesion in English*, Longman.

Hirsh, D., & Nation, P., (1992). What vocabulary size is needed to read unsimplified texts for pleasure? *Reading in a Foreign Language*, 8 (2). 689-696.

Laufer, B. (1989). What percentage of text-lexis is essential for comprehension. *Special language: From humans thinking to thinking machines*, Vol. 316323.

Rumelhart, D. E. (1975). Notes on a schema for stories. In D. G. Bobrow, & A. Collins (Eds.), *Representation and understanding: Studies in cognitive science*. NY: Academic Press. 53-120.

Mercer, S., & Dörnyei, Z. (2020). *Engaging Language Learners in Contemporary Classrooms*, *Cambridge Professional Learning*.

Schmidt, R. W. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 11 (2). 129-158.

Zimmerman, B. J., & Schunk, D. H. (1989). *Self-Regulated Learning and Academic Achievement, Theory, Research, and Practice*, Springer-Verlag Publishing.